美的情操に関する発達的研究*

北海道学芸大学

星 野 喜 久 三**

情操についてのかなり一般的な定義は、それが真、善、美、聖等の文化的、社会的、抽象的な価値に結合した感情であるということであろう(8,13)。また、情操は構造において、McDougall や Shand(1,9) のいう、一定の対象にたいして、精神活動の根底にあつて複合的に体制化された情緒傾性であり、品性の中核概念をなす。Cattell(3) においても、情操は永続的、力動的構造をもち、大きな複合的態度であるとみなされている。Wallon, H. (5) は情動と知能的作用の対立抵抗過程を経て、心理的表象が情動を抑圧し、優位にたつとき、そこに生じた情動性の弱められた感情を情操及び情念と考えているようである。

筆者は情操を価値感情と規定し、その複合的特質についても、価値対象についての意味または意味に本来的に伴われる感情の多様性と考えたい***。なお、情操は状態において、情神構造の根底にあつて永続的、恒常的、固有的な感情傾性をなす大脇(11) の表象感情、または千葉(4) の無記感情に類以しているとも考えられる。

本研究は、価値感情の一領域としての美的情操(自然界や芸術作品に接して美的価値を対象として発生する複合的感情)を、文章表現による自然描写についての意味の把握を通じて、発達的に考察しようとしたものである。

方 法

文章完成法が用いられた。しかし、性格検査法として

* A study of the development of aesthetic sentiments.

** by Hoshino, Kikuzo (Hokkaido Gakugei University)

*** 価値と感情の密接な関係については、早くから現象学的立場を採る者において強調されている。Sche-ler, M. によれば、感情は価値をもっとも卑しいものから、もっとも高尚なものに至るまで意味づける。Maisonneuve(7)によれば、価値は情動的経験によってただちに把握されるのであって、価値を発見する感情に無縁ないつさいの意味、とくに知的判断をそこにもたない。

のそれがもつほどの自由な投影は許されない。そのかわり、前後の文脈から価値を示すのに適切な言語表現が求められた。自然を描写した短文 13 条が選択された。Table 1 のような質問紙をあたえて()の中へ適切な感情表現の形容詞をいくつでもかまわず記入せしめた。ただし全問題を通じて、1 度使用した表現を 2 度以上使用することを許さなかつた。この手続によつて情操に含まれる多様な意味がすべて吐露されるものとおもわれる。被験者は問題場面にたいして、感情的作用によつて状況の意味を発見し、適切な言語表現によつてその意味の自己表示を可能にし、その言語の反作用によつて感情興奮を得る。これは感情にたいする現象学的アプローチの過程 (Buytendijk(2)) といえるであろう。

かつて大脇(11,12) は、表象感情の研究において、言語によつて表現された好感感情の内容を 3 内至 5 系統に分類した。筆者はそれをさらに細分し、新たにそれに附加して 13 の美的価値の意味系統を分類した。Table 1 の 13 の問題はこれらの系統を各々含んでいるものとみなされる。① 温い、のどかな、のんびりした、平和な等、② 勇しい、元気な、生き生きした、精悍な等、③ 雄大な、荘大な、崇高な、厳しい等、④ あつさりした、淡泊な、さらりとした等、⑤ 可愛い、可憐な、やさしい、いぢらしい等、⑥ にぎやかな、滑稽な、面白い等、⑦ 綺麗な、美しい、はなやかな等、⑧ 上品な、優美な、気品のある等、⑨ 清々しい、清潔な、清楚な、冷やかな等、⑩ 渋味のある、さびのある、ゆかしい等、⑪ 淋しい、哀愁のある、懐古的な等、⑫ うつそうとした、深みのある、静かな、深閑とした等、⑬ 軽快な、爽快な、テンポの速い、スリルのある等を各々含んでいるものとみなす。

被験者 Table 2 の通りである。中学校は釧路市弥生中学校、高等学校は釧路市湖陵高等学校、大学は北海道学芸大学釧路分校である。

施行日 1958 年 2 月上旬

結 果 と 考 察

Table 1 美的情操に関する質問紙

- ① 牧場には、青草が芽をだし、春の日をいつばいに浴びて、牛が憩っていた。その景色に、とても（ ）感じをする。
- ② 鯉が、しぶきをあげて急流をさかのぼっていくようすや、鯉のぼりが五月の青空に泳ぐ姿は、おもつただけでも（ ）感じがする。
- ③ 頂上に雪をいただき、大空にそそりたつこの山こそ、ながいあいだ、ひとびとを一步もちかづけなかつた山だ。（ ）感じがしてくる。
- ④ うすい墨で一筆に書き流されたこの竹の絵には、油絵にはみられない味わいがある。（ ）感じがする。
- ⑤ この花はなんという花だろう。薄桃色の小さな花びらと、赤ん坊の手のような葉をつけて、庭の隅に咲いている。（ ）感じがする。
- ⑥ 店先に並べられたたくさんの人形が、朝日をあびていつせいにめをさまし、おはなしをはじめた。（ ）感じがする。
- ⑦ 月の光が、花園を明るく照らし、白や、青や、赤や、いろいろの草花が、夜の空気の中におつていた。なんと（ ）晩だろう。
- ⑧ 鶴は、古くから日本の絵や、歌や、物語の中のでてくる。その姿は、いつも（ ）感じがする。
- ⑨ コップの水に、菊が一輪さしてある。テーブルに、白くその影が光っている。（ ）感じだ。
- ⑩ 薄暗い床の間に、相馬焼の陶器が、銀色の光をはなっている。じつとみていると（ ）感じがにじみでている。
- ⑪ やがて、日がすつかりしずんでしまう。風の音がする。虫の声がきこえてくる。秋の夕暮は、ほんとうに（ ）感じがする。
- ⑫ 寺院は、山奥深く、おいしげる緑の木立にかこまれていた。そこはいかにも（ ）感じがする。
- ⑬ スキーは雪煙をあげて、急な斜面を一直線にすべっていく。（ ）感じだ。

Table 2 被 験 者

性 別	中Ⅰ	中Ⅱ	中Ⅲ	高Ⅰ	高Ⅱ	高Ⅲ	大	計
男	53	50	59	71	42	31	83	389
女	33	50	55	31	10	13	22	214
計	86	100	114	102	52	44	105	603

答えられた適切な言語表現1個について1点があたえられた。表現の意味が状況にやや不適切であつたり（①における“爽快な”）、全体の状況に合致せず一部の事物や状況にのみ適切であつたり（②における“清々しい”）したばあいは、その表現に0.5点があたえられた否定的感情表現（恐しい、不気味な、薄気味悪い等）には1表現に1点をあたえたが、別個の考察対象とした。状況に全く合致しない不適切な表現は抹殺した。1表現についての以上の決定は、ほとんど筆者一人の数回にわたる検討の結果にもとづいてなされた。

一般的発達傾向 1点をあたえられた表現と0.5点をあたえられた表現を合計し、各学年の平均得点を示したものが Fig. 1 である。これを分散分析した結果が Table 3 である。Table 3 から学年間にのみ有意な差が認められる。性差、交互作用は有意でない。Fig. 1 より、中Ⅲか

Fig. 1 表現量の発達

ら、高Ⅰ、高Ⅲから大学へかけて急激な表現量の増加がみられるようであるが検定の結果は次の通りであつた。

Table 3 表現量の変動分析

変動因	SS	df	MS	Fo
性	1.58	1	1.58	1.94
学年	219.02	6	36.50	44.89**
交互作用	8.18	6	1.36	1.68
誤差	478.97	589	0.81	
全体	707.75	602		

** 1%以下の危険率で有意

中Ⅲ男子と高Ⅰ男子の差 $t = 3.32 > 2.58$

中Ⅲ女子と高Ⅰ女子の差 $t = 5.43 > 2.58$

高Ⅲ男子と大学男子の差 $t = 1.76 < 2.58$

高Ⅲ女子と大学女子の差 $t = 6.29 > 2.58$

1%以下の危険率で、高Ⅲ男子と大学男子の差を除いてはいずれも有意であることが認められる。表現の多様性からみた発達 は Table 4 に示されている。この数値は答えられた表現の種類数についての学年平均である。適切な表現、やや適切な表現とも高Ⅰから高Ⅱへかけての発達が著しいようである。適切な表現では女子が男子に勝っているようである。以上を要約すると、表現量及び表現の多様性の発達の増加から、情操のもつ意味感情が多量かつ多様になっていく、すなわち情操が客観的になり、そのもつニュアンスが豊富になっていくことが認められる。発達は表現量については、中学から高校、高校から大学へかけて著しい。大体、中学（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）、高校（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）、大学と各々まとまりをみせているようである。表現のヴァリエーションについては、高Ⅰから高Ⅱへかけて著しいようであるが、高Ⅲから大学への急増はみられない。学年を通じて漸進的増加を示す。表現量において性差は認められない。表現のニュアンスの豊富さは女子において、より豊富のようである。否定的感情の各学年の平均量は Table 5 に示されている。この種の表現が多いことは情操が未発達である、すなわち客観

Table 4 表現の種類数

表現の性質		中Ⅰ	中Ⅱ	中Ⅲ	高Ⅰ	高Ⅱ	高Ⅲ	大	$\bar{x}$
適 切	男	0.13	0.66	0.20	0.21	0.32	0.41	0.27	0.24
	女	0.18	0.17	0.15	0.31	0.65	0.58	0.54	0.37
	$\bar{x}$	0.15	0.16	0.18	0.25	0.38	0.47	0.35	0.30
やや 適切	男	0.10	0.10	0.14	0.12	0.18	0.19	0.16	0.14
	女	0.10	0.13	0.14	0.19	0.25	0.24	0.24	0.19
	$\bar{x}$	0.10	0.12	0.14	0.15	0.19	0.20	0.19	0.16
否定的	男	0.02	0.01	0.02	0.01	0.02	0.01	0.01	0.02
	女	0.03	0.03	0.02	0.01	0.04	0.01	0.02	0.02
	$\bar{x}$	0.03	0.02	0.02	0.01	0.02	0.01	0.02	0.02

Table 5 否定的感情の表現量

性別	中Ⅰ	中Ⅱ	中Ⅲ	高Ⅰ	高Ⅱ	高Ⅲ	大
男	1.02	0.92	0.75	0.61	0.60	0.29	0.45
女	1.06	0.94	0.85	0.81	0.60	0.23	0.41
$\bar{x}$	1.03	0.93	0.80	0.67	0.60	0.27	0.44

性をもっていないことを示す。学年が進むにつれて減少の傾向を辿っていることが認められる。

問題別の発達傾向—表現量について— 次のような観点から、Fig. 2 を考察することができる。

1. 表現量 問題①、⑦、②のような場面についてはその意味感情が他の場面と比較して明確に把握されているようであることが、多量な表現量からうかがえる。これらの場面については被験者が実際の経験、読書、学校教育等の環境条件によつて早くから親しんでいるために、その意味を容易に感知することができるものとおもわれる。④は得点が少く、とくに⑩は他よりもずっと低い。これらの場面は日本的な淡泊、風雅、さび、わび、渋味、幽玄等の感情を含んでいるが、このような感情の発達は比較的の不十分であるといえる。

2. 性差 問題⑨、⑤、⑥において女子が男子よりも多いようである。とくに⑥において多いようである。この感情は高Ⅱから大学まで男子を凌駕しているようである。⑨清楚な、静かな場面は、その意味が青年期後期の女子によつてとくによく把握されるものとおもわれる。⑤、⑥のような場面は女子のもつ、いつくしみ、可愛がある感情を多く喚起するものとおもわれる。⑪のような淋しい、感傷的な場面にたいしても女子の感情はより分化しているようである。以上とは逆に、⑬、②のような活発な、躍動的感情場面は男子に多いようである。

3. 発達の急激な場面 低学年では少量で、以後急増する場面として、グラフから③、④、⑪、⑫があげられる。③においてこの傾向はとくに顕著のようである。いずれも中Ⅲから高Ⅰへかけての増加が目立ち、③、⑪では高Ⅲから大学へかけての発達も急激である。低学年でも比較的多く、以後も増加するものとして①がある。⑬もこれにやや近い。どちらも中Ⅲと高Ⅰ、高Ⅲと大学の差が顕著のようである。

4. 漸進的発達を辿る場面 低学年から一定のゆるい傾斜をもつて発達していくものとして⑥がある。⑩もこれに近い。

5. 発達の变化のない場面 低学年の表現量が少なく、以後表現量の恒常なものとして⑥がある。この場面は早くからその意味が明確に把握されているものとおも

Fig. 2

われる。⑨も⑥とやや類した傾向を辿る。

6. 発達過程の混乱している場面 これに該当するものの中には、男女平均の発達過程が混乱しているものと平均の発達曲線は混乱していないが性別に分けてみたとき混乱しているものがある。前者に②が、後者に⑦、⑧が各々該当する。

否定的感情は Table 6 に示されている。③、⑩、⑫に多い。これらは“恐しい”、“無気味な”等の表現で大部分を占められている。⑩では適切な表現量が少く、この種の表現量が多いことは、この場面の美的価値が把握

Table 6 問題別にみた否定的感情の表現量

問題	中I	中II	中III	高I	高II	高三	大	$\bar{x}$
③	男	0.04	0.40	0.37	0.23	0.22	0.19	0.29
	女	0.30	0.46	0.29	0.35	0.10	0.15	0.25
	$\bar{x}$	0.36	0.43	0.34	0.26	0.19	0.18	0.26
⑥	男	0.08	0.06		0.03	0.02		0.03
	女		0.02	0.02	0.06			0.05
	$\bar{x}$	0.05	0.04	0.01	0.04	0.02		0.03
⑩	男	0.32	0.22	0.19	0.21	0.29	0.03	0.20
	女	0.39	0.24	0.33	0.13	0.10	0.08	0.27
	$\bar{x}$	0.35	0.23	0.26	0.19	0.25	0.05	0.22
⑫	男	0.17	0.26	0.17	0.14	0.05	0.03	0.12
	女	0.30	0.18	0.13	0.26	0.40		0.18
	$\bar{x}$	0.22	0.22	0.15	0.18	0.12	0.02	0.15
⑬	男	0.06		0.02		0.02	0.03	0.02
	女	0.06	0.02	0.09				0.02
	$\bar{x}$	0.06	0.01	0.05		0.02	0.02	0.02

されにくいことを示している。

問題別の発達傾向—表現について— 各問題内に含まれる表現は非常に数が多い(全表現種別数=889)。そこで考察し易くするために、各問題毎に適切な表現(先に1点をあたえた表現)のみを選択し、出現頻数の多い表現から順次に頻数を加算していつて、全頻数の50%に達したとき、その中に含まれる表現のみを Table 7 に掲載した。この数値は1表現を100点としたときの学年別の平均値である。先には適切な表現は1表現につき1点であつたが、ここで100点にしたのは単に表を見易くするという理由からである。注意すべきことは、表現を場面から切離して考えることはできないということである。⑦の“静かな”、⑨の“静かな”は表現としては同一だが、その意味のニュアンスは各々の場面と結合して微妙に相違しているものである。

次のような観点から Table 7 を考察することができる。

1 表現数 ⑩では7個の表現に頻数が分散しているのにたいし、⑤では1個に集中している。⑤では“かわいらしい”、という意味が共通に把握されているのにたいし、⑩ではこのような共通の意味がない。

2 表現量 “さみしい”、⑨, “渋い”、⑩, “奥ゆかしい”、⑩, “おごそかな”、⑩, “高貴な”、⑩, “古風な”、⑩, “神秘的な”、⑩, “古典的な” ⑩は表現量が0.0~4.9の間にあり、少い。これにたいし、“かわいらしい”、⑤は43.4で圧倒的に多く、“のどかな”、①, “勇しい”、② “美しい”、⑦も30.0~39.9の間にあり、多量である。主

に場面⑩のもつ諸感情は少数の者にしか適確に把握されない。

3 性差 “のんびりした”、①では各学年とも女子が男子より多いようである。“かわいらしい”、⑤は女子において著しく多い。“静かな”、⑨は女子が男子の約3倍である。男子に目立つて多い表現は“爽快”である。⑤の場面の“かわいらしい”、⑨の場面の“静かな”を女子的感情とすれば⑬の“爽快な”を男子的感情とみなすこともできよう。このことは(⑬, ②で男子, ⑨, ⑩で女子の表現量が多いことも参照して)、西平(10)が、青年期女子においては 悲哀, 平静な感情 の感傷性の量が 爽快な感情 を凌駕するといつたこととはほぼ一致する。

4 発達の急激な表現 低学年では少量で、以後急増する表現として“のどかな”、①, “雄大な”、③, “爽快な”、⑬がある。“のどかな”は中Ⅲ~高Ⅰ, 高三~大学へかけて増加が著しく、“雄大な”は高校へ入つて急増するようであり、“爽快な”は中Ⅲ~高Ⅰ, 高Ⅱ~高三へかけて急上昇するようである。これらの表現の意味は青年期を通じて多くの者に獲得されるとおもわれる。

5 漸進的発達を辿る表現 “かわいらしい”、⑤は高Ⅰでかなり増加し、以後恒常である。“さびしい”、⑪, “美しい”、⑦, “すばらしい”、⑦は学年を通じてゆるい上昇線を辿っている。これらの表現はいづれも低学年でもその量が少くない。

6 発達の变化のない表現 低学年の表現量が少なく、以後表現量の恒常なものとして“のんびりした”、① “勇しい”、②, “元気な”、②, “生き生きした”、②, “あつさりした”、④, “すつきりした”、④, “にぎやかな”、⑥, “楽しい”、⑥, “静かな”、⑦, “静かな”、⑨をあげることができる。“にぎやかな”、“楽しい”、“あつさりした”、“すつきりした”には発達曲線に若干の混乱がみられる。

7 減少傾向を辿る表現 低学年に多く、高学年へ進むにつれて減少するものとして“美しい”、⑧があげられる。学年が進むにつれて、他により適切な意味が見出されてくるためにこれが減少してくるものとおもわれる。

8 或る学年まで出現皆無の表現 中Ⅰにおいて皆無のもの、“神秘的な”、③, “清潔な”、⑧, “清潔な”、⑨ “静寂な”、⑫。中Ⅰ~中Ⅱにおいて皆無のもの、“素朴な”、④, “淡泊な”、④, “優雅な”、⑧, “渋い”、⑩, “高貴な”、⑩, “落着いた”、⑫。中Ⅰ~中Ⅲにおいて皆無のもの、“古風な”、⑩, “神秘的な”、⑩, 中Ⅰ~高Ⅰまで皆無, “古典的な”、⑩。中Ⅰ~高Ⅰまで皆無, “おごそかな”、⑩。これらの表現はいづれも発達の的におくられて出現している。⑩においてはほとんどの表現が中Ⅰ~中Ⅲ

Table 7 問題別にみた適切な表現の出現量

表 現										表 現											
	中Ⅰ	中Ⅱ	中Ⅲ	高Ⅰ	高Ⅱ	高Ⅲ	大	$\bar{x}$		中Ⅰ	中Ⅱ	中Ⅲ	高Ⅰ	高Ⅱ	高Ⅲ	大	$\bar{x}$				
①	のどかな	男女	3.8	12.0	37.3	49.3	45.2	67.7	63.9	39.9	やさしい	男女	3.8	16.0	10.2	4.2		3.2	5.3		
		男女	6.1	14.0	12.8	58.1	40.0	84.6	63.6	39.9		男女	9.0	8.0	7.2	6.4		4.5	5.1		
		男女	4.7	13.0	25.4	52.0	44.2	72.7	63.8	39.9		男女	6.0	12.0	9.0	5.0		2.3	5.2		
		男女	22.6	2.0	10.2	28.2	23.8	22.6	36.1	20.8		男女	22.8	8.0	11.9	12.6	9.6	9.6	10.8	12.2	
②	のんびりした	男女	48.5	2.0	7.3	38.7	50.0	30.8	40.9	31.2	さびしい	男女	15.0	10.0	9.0	3.2	30.0	15.4	18.0	14.4	
		男女	32.6	2.0	8.8	31.4	28.8	25.0	37.1	26.0		男女	20.4	9.0	10.8	10.0	13.3	11.5	12.4	13.3	
		男女	36.1	30.0	25.5	30.8	45.6	32.0	38.4	34.1		男女	1.9	2.0	5.1	4.2	9.6	9.6	7.2	5.7	
		男女	30.0	38.0	21.6	44.8	50.0	38.5	45.0	38.3		男女	12.0	12.0	3.6	19.2	10.0	30.8	18.0	15.1	
③	勇 しい	男女	34.8	34.0	24.3	36.0	45.6	34.5	39.9	36.2	静 かな	男女	6.0	7.0	4.5	9.0	9.5	16.1	9.5	10.4	
		男女	17.1	22.0	15.3	9.8	9.6	3.2	10.8	12.5		男女				15.4	9.6	6.4	15.6	5.3	
		男女	6.0	16.0	9.0	9.6	20.0	7.7		9.8		男女		4.0	5.4	16.0		7.7	22.5	7.9	
		男女	12.2	19.0	12.6	9.8	11.4	4.6	8.6	11.2		男女		2.0	2.7	16.0	7.6	6.9	17.1	6.6	
④	元 気 な	男女	9.4	16.0	5.1	4.2	16.7	9.7	6.0	9.6	清 潔 な	男女	5.7	2.0	5.1	4.2			2.4	2.8	
		男女	9.1	8.0	9.1	6.5		18.2	7.3			男女	12.1	4.0	3.7				2.4	2.8	
		男女	9.3	12.0	7.0	4.9	13.5	6.8	8.6	8.5		男女	8.1	3.0	4.4	2.9			1.9	2.8	
		男女	7.6	10.0	13.6	23.8	31.2	38.4	27.6	21.7		男女				3.4	4.2	4.8	9.6	4.8	
⑤	神秘(的)な	男女	9.0	14.0	16.2	25.0	20.0	30.8	31.5	21.0	渋 い	男女				3.2		23.1	4.5	4.4	
		男女	8.4	12.0	15.3	25.0	28.5	36.8	28.5	21.4		男女				1.8	4.0	3.8	13.8	4.8	
		男女			8.0	1.8	9.6	20.0	7.7	22.5		9.9	男女	3.0	4.0		1.7		2.4	4.8	4.1
		男女			4.0	5.4	23.0	24.7	13.8	30.4		12.9	男女	1.2	2.0	0.9		10.0		4.5	3.1
⑥	荘 厳 な	男女			10.2	5.6	24.0	25.6	14.4	11.4	奥ゆかしい	男女						3.8	3.6	1.1	
		男女	3.0	2.0	1.8	12.8	20.0	23.1	40.5	14.7		男女						6.4	4.8	1.6	
		男女	1.2	1.0	6.3	8.0	22.8	25.3	20.0	13.1		男女							13.5	1.9	
		男女										男女							4.6	6.7	
⑦	あつさりした	男女	1.9	6.0	8.5	12.6	24.0	6.4	13.2	10.4	高 貴 な	男女				2.8	2.4	3.2	1.2	1.8	
		男女	6.0	4.0	3.6	12.8	10.0	23.1	13.5	10.4		男女			1.8	2.0	1.9	2.3	4.0	1.8	
		男女	3.6	5.0	6.3	13.0	20.9	11.5	13.3	10.4		男女			0.9	2.0			4.8	0.9	
		男女	11.4	6.0	6.8	14.0	16.8		4.8	8.5		男女				1.4			2.3	4.0	
⑧	すつきりした	男女	12.0	2.0	3.6	12.8	20.0	7.7	9.0	9.5	古 風 な	男女					10.0	7.7	4.5	3.2	
		男女	12.0	4.0	5.4	14.0	17.1	2.3	5.7	9.0		男女					1.9	2.3	4.8	2.6	
		男女			3.4	12.6	12.0	25.6	9.6	9.0		男女					1.0		3.2	1.2	
		男女				9.6	20.0	15.4	18.0	9.0		男女					5.6			0.9	
⑨	素 朴 な	男女			1.8	12.0	13.3	23.0	11.5	9.0	神 秘 (的) な	男女					6.4		2.3	1.0	
		男女	1.9	6.0	3.4	5.6	4.8	6.4	3.6	4.5		男女						2.4	6.5	4.8	
		男女	6.0	2.0	6.4	10.0	7.7		4.6			男女						7.7		1.1	
		男女	3.6	4.0	1.8	6.0	5.7	6.9	2.9	4.6		男女						1.9	6.8	3.8	
⑩	さつぱりした	男女			3.4	2.8	7.2	9.6	9.6	4.7	古典的な	男女							7.7		
		男女										男女								4.8	2.0
		男女										男女									1.1
		男女										男女									1.6
⑪	淡 白 な	男女			1.8	2.0	5.7	11.5	10.5	4.4	さびしい	男女	9.5	12.0	17.0	37.8	21.6	35.2	36.0	24.2	
		男女										男女	15.0	18.0	14.4	48.0	20.0	23.1	36.0	24.9	
		男女										男女	12.0	15.0	16.2	40.0	20.9	32.2	36.0	24.6	
		男女										男女	3.8	2.0	8.5	2.8	4.8	6.4	12.0	5.8	
⑫	かわいらしい	男女	27.0	42.0	43.2	70.4	50.0	77.0	67.5	53.9	さみしい	男女	3.0	6.0	7.2	6.4	20.0	15.4		8.3	
		男女	18.0	27.0	39.6	59.0	50.0	55.2	50.4	43.4		男女	3.6	4.0	8.1	4.0	7.6	9.2	9.5	7.1	
		男女	20.9	12.0	18.7	26.6	12.0	22.4	34.8	21.1		男女									
		男女	27.0	10.0	23.4	32.0	80.0	15.4	22.5	30.0		男女	9.5	10.0	6.8	26.6	7.2	16.0	3.6	11.4	
⑬	にぎやかな	男女	24.0	11.0	21.6	29.0	24.7	20.7	32.3	25.6	静 かな	男女	6.0	15.0	10.8	24.0	11.4	11.5	3.8	11.8	
		男女	15.2	18.0	11.9	15.4	9.6	3.2	12.0	12.2		男女		2.0	1.7	8.4	21.6	16.0	20.4	10.0	
		男女	21.0	12.0	7.2	25.6	20.0	23.1	18.0	18.1		男女		2.0		3.2	40.0	38.5	22.5	15.2	
		男女	18.0	15.0	9.9	19.0	11.4	9.2	13.3	15.2		男女		2.0		0.9	7.0	24.7	23.0	20.9	12.6
⑭	楽 しい	男女	22.8	16.0	27.2	33.6	24.0	32.0	37.2	27.5	落着いた	男女				5.1	7.0		3.2	12.0	
		男女	33.0	28.0	16.2	32.0	70.0	46.2	45.0	38.6		男女				3.6	3.2		7.7		
		男女	27.6	22.0	22.5	34.0	32.3	36.8	39.0	33.6		男女				4.5	6.0		4.6	9.5	
		男女	13.3	18.0	25.5	28.0	14.4	19.2	24.0	20.3		男女				3.4	1.4		4.8	2.8	
⑮	美 しい	男女	21.0	18.0	12.6	19.2	10.0	22.5	14.8		ひっそりした	男女	1.9	8.0		3.6	9.6	10.0	7.7	4.5	6.2
		男女	16.8	18.0	19.8	26.0	13.3	13.8	23.8	17.6		男女	6.0	2.0	3.6	9.6	10.0	7.7	4.5	6.2	
		男女	5.7	6.0	3.4	18.2	14.4	16.0	30.0	13.4		男女	3.6	5.0	3.6	4.0	1.9	2.3	4.7	4.5	
		男女	12.0	24.0	14.4	9.6	20.0	15.4	36.0	18.8		男女									
⑯	すばらしい	男女	8.4	15.0	9.0	16.0	15.2	16.0	31.4	16.1	爽 快 な	男女	1.9	4.0	6.8	26.7	19.0	32.0	36.1	18.1	
		男女										男女	1.2	3.0		22.4		7.7	15.0	6.7	
		男女										男女	1.9	4.0	6.2	25.5	15.4	25.0	32.4	12.4	
		男女										男女									
⑰	美 しい	男女	24.7	14.0	13.6	8.4	12.0	9.6	7.2	5.6	軽 快 な	男女	1.9	4.0	10.2	14.1	9.5		8.4	6.9	
		男女	18.0	18.0	16.2	16.0				9.7		男女				7.3	3.2	30.0		13.5	
		男女	22.8	16.0	15.3	11.0	9.5	6.9	5.7	7.7		男女	1.2	2.0	8.8	10.8	13.5		9.5	7.3	
		男女			8.5	15.4	7.2	22.4	14.4	9.7		男女	5.7	6.0	10.2	12.7	7.1	6.4	3.6	7.4	
⑱	優 雅 な	男女			3.6	16.0	10.0	13.5	6.2	7.5	勇 しい	男女	3.0	6.0	3.6	9.6	20.0		6.0	6.0	
		男女			6.3	16.0	7.6	16.1	14.3	7.5		男女	4.8	6.0	6.2	11.8	9.6	4.6	2.7	6.7	
		男女			1.8	9.6	20.0		9.0	6.2		男女	3.8	2.0	6.8	2.8		16.0	16.0	6.8	
		男女	1.9	6.0	13.6	18.2	14.4	12.8	3.6	10.1		男女				1.8	3.2	10.0	7.7	18.0	
⑲	優 美 な	男女	3.0							6.2	痛 快 な	男女	2.3	3.0	4.4	2.9	1.9	13.8	15.3	6.6	
		男女	2.4									男女	7.5	6.0	8.5	5.6	9.5	3.2	3.6	6.3	
		男女			2.0	1.7	8.4	9.6	9.6	5.2		男女	6.1	2.0		3.2	10.0		4.5	3.7	
		男女			5.0	4.5	9.0	7.6	6.9	9.5		6.4	男女	7.0	4.0	4.4	4.9	9.6	2.3	3.6	5.0
⑳	清 潔 な	男女									すばらしい	男女									
		男女										男女									
		男女										男女									
		男女										男女									

まで出現しておらず、1、2の表現は高Ⅰ、Ⅱまで皆無である。これらの感情は大学においても他の感情と比較したときは明確に理解されているとはいえない。

要約と結論

自然の美的場面を描写した短文にたいする意味の把握を通じて、美的情操を発達的に跡附けることが本研究の目的である。その結果の要約と結論は次の通りである。

1. 感情表現量において学年間の差は有意である。性差は有意でない。男女とも中Ⅲから高Ⅰへ、女子において高Ⅲから大学へ増加量が顕著である。表現のヴァリエーションは漸進的に豊富になってくるようであるが、高Ⅰから高Ⅱへの発達が著しいようである。女子は男子より表現の多様性に富んでいるらしい。

2. 場面①(牛が憩っている春の牧場)、⑦(月の光に明るく照された夜の花園)、②(急流をさかのぼる鯉、青空に泳ぐ鯉のぼり)、⑤(庭の片隅に咲いている小さな花)に表現量が多く、これらに各々含まれる“のどかな”、“美しい”、“勇しい”、“かわいらしい”の表現は他の表現より著しく多く出現する。これらの場面及び表現は低学年でもかなりの量を持ち、その後の発達は急激なもの、漸進的なもの、恒常的なものに分れる。これにたいし、場面④(薄墨で書き流された竹の絵)の表現量は少く、とくに⑩(床の間におかれた相馬焼の陶器)の表現量は目立って少く、両者の場面に含まれる“淡白な”、“素朴な”、“渋い”、“奥ゆかしい”、“おごりかな”、“高貴な”、“古風な”等の主に日本的美的感情の出現量は僅少であり、発達的にかなりおくれ(高Ⅱ、高Ⅲ)出現する。

3. 場面⑨(コップの水にさされた一輪の菊)、⑤、⑥(朝日を浴びて目を醒ました店先の人形)において女子が男子より多いようであるが、それらに各々含まれる“静かな”、“かわいらしい”、“にぎやかな”の表現が女子に多いようである。これらの表現は低学年でもかなり多く出現している。これにたいし、⑬(急傾斜を滑行するスキー)、②のような場面では男子が女子よりも多く、⑬に含まれる“爽快な”は男子に圧倒的に多い。

4. “恐しい”、“無気味な”等の否定的感情は学年が進むにつれて減少する。③、⑩、⑫(山奥の木立に囲

まれた寺院)に多い。

Hurlock(6)は、青年期後期へ入ると十分な知的発達によつて抽象的なものの価値を見出すことができるようになり、ここに美的情操の発達をみるといつているが、本研究のような、文章表現に含まれる美的価値の意味を理解することでは、児童期では極めて困難であり、青年期へ入ってから、とくに中期、後期における著しい上昇を伴つて、発達していくことが認められる。

文 献

- (1) Allport, W. G. : *Personality. A psychological interpretation.* 1955, 86—97.
- (2) Buytendijk, F. : *The phenomenological approach to the problem of feelings and emotions.* (in) Reymert, M. L. (eds.) : *Feelings and emotions.* 1950, 127—141.
- (3) Cattell, R. B. : *Personality. A systematic theoretical and factual study.* 1950, 157—162.
- (4) 千葉胤成 : 無記感情について 心理学論文集, 第2巻, 1929.
- (5) 波多野完治 : 精神発達の心理学. 1956, 223—227.
- (6) Hurlock, E. B. : *Adolescent development.* 1946, 116—117.
- (7) Maisonneuve, J. : 感情. 文庫クセジュ, 1955, 48. (山田悠紀男訳)
- (8) 正木正 : 教育心理学序説. 1956, 61—71.
- (9) McDougall, W. : *An introduction to social psychology.* 1923, 121—161.
- (10) 西平直喜 : 女学生の感情調査. 児童心理, 第2巻, 1948, 749—756.
- (11) Ohwaki, Y. : *Das Vorstellungsgefühl und das im Hintergrund desselben liegende. Tohoku Psychologica Folia*, 9, 1942.
- (12) 大脇義一 : 感情的体験の構造に就いて ロゴスとパトス, 1949, 105—120.
- (13) 東京学芸大学教育研究所編 : 情操教育の問題, 1957, 2—89.

(1958年4月24日受稿)

these figural patterns considerably differed from the "conformity" pattern, as they passed each other rather than approaching mutually.

The author concludes that these trends may indicate the indefiniteness and the changeability of the adolescents' attitudes with reference to their life.

A STUDY OF THE DEVELOPMENT OF AESTHETIC SENTIMENTS

By Hoshino, Kikuzo
Hokkaido Gakugei University

The object of the present study is to trace the development of aesthetic sentiments of the adolescents by examining their manners of grasping the meanings of the short sentences which contain aesthetic descriptions of the natural world. Thirteen sentences, each of which has different affective nuance, were selected. Each of those sentences has parentheses in the part and the subjects were required to fill it with many adjectives expressing relevant feeling of them as they chose.

The subjects were 389 males and 214 females, including those from a junior high school and the above college students.

The results were as follow :

In the quantity of feeling-expressing-adjectives, the differences between grades are significant, whereas that between sexes insignificant. In quantitative aspects, there is increase of words in the period between the 3rd grade of junior high school and the 1st grade of senior high school in both sexes, and between the 3rd grade of senior high school and college in females. The variety in expressing affect seems to be gradually increased, particularly great in the period between the 1st grade and the 2nd of senior high school. In females the expressions are more varied than in males.

A STUDY OF FINGER SUCKING OF CHILDREN

By Miyamoto, Minoru
Hokkaido Gakugei University

The present investigation aims at studying factors which may influence sucking behavior of school children in terms of their personality traits.

Out of 1354 elementary school children, 34 Ss were selected as a sucking group and 29 Ss as non-sucking group. The teachers in charge of the children were requested to fill series of questionnaires on sucking behavior in the period of infancy, and

childhood, and on family environment and nursery history of children in the both groups.

Results of this investigation revealed :

- 1) In addition to the sucking habit, most of the children of sucking group were found to possess in overlap some of its accompanied movements of biting and finger-touching habits.
- 2) Analyzing the situations where high frequen-